

帰国報告 ニューデリー日本人学校とインドの暮らし

札幌市立白石小学校 教諭 島田 裕文
(派遣期間 平成15年度～17年度)

1. インドの概要

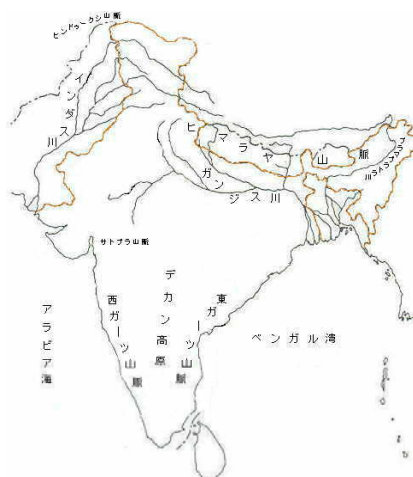
(1) 位置と地形

インドはアジア大陸の南に位置し、ひし形の形をした国で、インド洋に大きく突き出した半島部と、その北の内陸部からなる。インドの北側には世界の屋根、ヒマラヤ山脈が東西に伸び、その西にはパミール高原やヒンドゥークシ山脈が連なっている。

さらに半島の東側・西側にはそれぞれ東西のガーツ山脈が、また中央にはサトプラ山脈がのびてり、これらの三つの山脈に囲まれてデカン高原がある。ここは、火山灰質の土壌が広がり、綿の栽培には大変適した土地となっている。

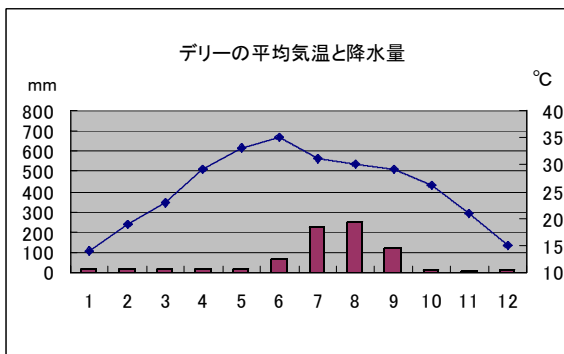
インドにはガンジス、インダスの二つの大河があり、そのうちのガンジス川はヒマラヤ山脈の南を東に流れ、ブラマプラトラ川と合流してベンガル湾に注いでいる。この地域は農耕に適した平野が広がっている。

また、もう一つのインダス川は、川の源をインドに発して隣国のパキスタンに流れている。この川も多くの支流を集めて大河となりアラビア海に注いでいる。そして、支流が集まる場所には広大な平野が広がっており、ここをパンジャブ地方といい、インド、パキスタン両国にまたがる穀倉地帯となっている。両大河の平野部は、インドでもっとも農業がさかんな地域である。



(2) 気候

インドを含む南アジアの気候はモンスーン気候と呼ばれている。モンスーンというのは、季節風のことで、この風は海洋と大陸の暖まり方によって時期ごとに吹く風が変わる。インドは北にヒマラヤ山脈などの高い山地があり、南にはインド洋があり、この間をモンスーンが吹く。これによって季節が激しく変化するのである。1年間を見ても、地方によって違いはあるが、インド気象庁は4月～5月を「暑期」、6月～9月を「雨期」、10月～11月を「中間期」、12月～



3月を「冬期」の4つの季節に分けている。暑期には日中の気温が40℃を越す地域もある。雨期にはインド洋から水分をたくさん含んだモンスーンが、南西から吹く。このためインドは大雨にみまわれる。北東部のアッサム州や西ベンガル州は、特に降水量が多く、1年間に12,000ミリを越すこともあり、世界で一番雨の多い地域といわれている。この雨期に、インドでは年間降水量の85%が降るのである。10月頃になると雨期が終わり、それまでとは反対に北東からのモンスーンが吹き始める。冬期には気温も下がってきて、朝晩は肌寒く感じられるほどである。この季節がインドではもっとも過ごしやすい気候となる。しかし、この快適な季節には、日本の台風にあたるサイクロンが、ベンガル湾でたびたび発生して、人々に大きな被害を与える。

(3) 連邦国家の政治

現在のインドは、第二次世界大戦後の1947年にイギリスから独立した。独立3年後には憲法もつくられ、この憲法により、インドは民主共和国として歩み始めた。

国の制度をみると、国家元首である大統領がおり、大統領は議員によって選ばれ、任期は5年。三権分立している点と内閣を首相が率いる点においては、それまで植民地として支配を受けてきたイギリスに似ている。

インドは連邦制を採用していて、28の州とデリーなどの7つの連邦政府直轄地からなっている。中央には、国全体の政治を行う中央政府があり、外交、国防、通貨、経済計画などを受けもっている。上・下両院からなる連邦議会がおかれ、上院は各州を、下院はインド全国民を代表する。下院の選挙権は、インドでは18歳から与えられる。そして、州それぞれに議会があり、その州にあった政治を行えるようになっている。

(4) 言語

インドの公用語の代表はヒンディー語だが、国内の全地域で通じるわけではない。憲法にはヒンディー語の他に17の言語が公用語の主要なものとしてあげられている。英語が準公用語として、インド全体で広く使われている。



①+②	असम
③	असम
④	बंगाल
⑤	गुजरात
⑥	कर्नाटक
⑦	काश्मीर
⑧	केरल
⑨	महाराष्ट्र
⑩	मिजोरम
⑪	नेपाल
⑫	ओडिशा
⑬	पंजाब
⑭	राजस्थान
⑮	तमिलनाडु
⑯+⑰	उत्तर प्रदेश

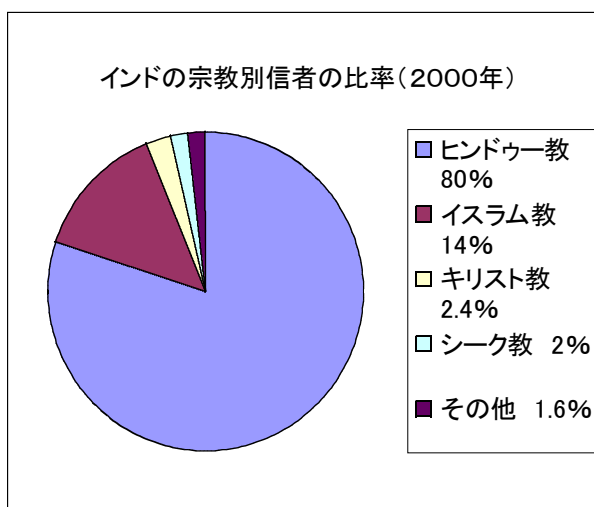
インド紙幣に印刷されているヒンディー語と英語以外の公用語

- ①+② アッサミー(アッサム州), マニプリ(マニプリ州)
- ③ ベンガル(西ベンガル州)
- ④ グジャラティー(グジャラート州)
- ⑤ カンナダ(カルナカタ州)
- ⑥ カシュミリー(ジャンム・カシミール州)
- ⑦ コーンクニー(ゴア州)
- ⑧ マラヤーナム(ケララ州)
- ⑨ マラーティー(マハラシュトラ州)
- ⑩ ネパーリー(ヒマラヤ山ろく)
- ⑪ オリヤー(オリッサ州)
- ⑫ パンジャーबी(パンジャブ州)
- ⑬ サンスクリット
- ⑭ タミル(タミル・ナドゥ州)
- ⑮ テルグ(アンドラ・プラデーシュ州)
- ⑯+⑰ ウルドゥ・シンディー(北インド)

(5) 宗教

長い歴史を持つこの国では、さまざまな宗教が、さまざまな神とともに人々の間に深く根づいている。信仰心はあつく、それぞれの宗教の教えやきまり、しきたりを守って生活している。

インドの宗教のうち、1番大きな勢力をもっているのがヒンドゥー教である。信者は国民の80%をしめている。2位のイスラム教は12%、シーク教は2%である。頭にターバンを巻いた人たちは、このシーク教の人たちである。



それぞれの教では、しきたりやタブーとされているものが違う。例えば、ヒンドゥー教徒は、牛を神聖な生き物として傷つけたり殺したりすることはない。もちろん、牛肉を食べることもない。一方、イスラム教徒は、ブタなどは汚れた生き物として、食べることが禁じられている。イギリスから独立した時、イスラム教徒が多いパキスタンがインドと分かれて別の国をつくったのも宗教のちがいによるものである。独立後も、ヒンドゥー教とイスラム教の宗教間の争いは続き、聖地をおそったり、寺院やモスクをこわしたりして問題となっている。これに対抗した爆弾テロなどもあり、宗教をめぐる争いがインド社会を不安定にしている。

また、ヒンドゥー教にはカースト制度というきびしい身分制度があり、人々はバラモン(僧侶・司祭)、クシャトリア(王族・士族)、バイジャ(平民・商人)、シュードラ(農奴・召使い)、さらにダリット(不可触民)などに分けられ、職業や結婚などそれぞれの身分で差別されてきた。この制度はインドの近代化をさまたげる大きな原因の一つと考えられ、1950年、憲法で禁止された。生活の中にはまだ残っているが、最近では教育も普及したため、若い人たちや都市に住む人たちを中心に、カーストにこだわらない人たちも増えている。

(6) 教育

①. 高まる教育熱

「How to beat the board exams」
新聞、EDUCATION TIMESに載っていた記事のタイトルである。内容は、進学・受験の重圧に押しつぶされないようにするため、本人及び、周りの親、教員はどんなことに気を付けなければならないか…といったものである。

インドは日本にもまして学歴社会であり、試験時期ともなると、その過熱ぶりや進級や受験に伴うストレスから来る問題等の記事が新聞にも多く載るようになる。また、それほど高所得ではない家庭でも、公立学校よりも何とかして私立学校に行かせたいと願っている親も多い。例えば、私が住んでいた家の斜め前の路上でテントを張りアイロンかけの店

を出していた親は、息子を私立学校に通わせていた。その息子は朝夕は父親の仕事の手伝いもし、私立学校にも通っているのである。また、息子を公立学校に通わせているドライバーは、できれば私立学校に行かせたいと言っていた。公立学校は私立学校に比べると英語等の教育内容が充実していなく、その為その親は子供を塾に通わせているとのことである。

このように、教育熱が高いのは、インドが学歴社会であり、学歴によって職業や給与がきまってしまう社会だからであるという。

②. インドの教育制度

《就学前教育》0～6才

保育所・幼稚園など様々な機関が存在する。私立学校では、就学前の教育段階からのクラスを併設していることが多いようである。pre-nursery→nursery→kindergartenという段階がある。

《初等教育》6～14才の8年間

この8年間は義務教育で、公立学校では無償となっている。1年生～5年生のprimary school（5年間）、6年生～8年生のmiddle school（3年間）に分けられる。

《中等教育》14～18才の4年間

前半の2年（9年生～10年生）と後半の2年（11年生～12年生）に分けられるが、前半の2年を初等教育の6年生～8年生と合わせてsecondary（6年生～10年生）、後半の2年間をsenior secondary（11年生～12年生）とする学校が多い。

なお、初等教育が義務化・無償化したのは2002年のことであり、以上のように現在、初等・中等教育は5-3-2-2制となっている。

《高等教育》18才～

大学・カレッジ・大学院からなる。

その他、中等・高等教育においては、以上の普通教育と平行して職業訓練校・ポリテク・高等専門カレッジの職業教育が存在する。

③. 進級と進学

各学期の期末試験と年度末に行われる総合試験の成績によって、進級できるか留年となるかが決まる。以前は小学校（primary）でも留年があったそうだが、現在は小学校段階での留年は無いという。その他の段階では厳しい試験制度がある。最も厳しいのは10年生と12年生で行われる全国共通テストである。

10年生終了時～AISCCE (All India Secondary Certificate Examination)

12年生終了時～AISSCE (All India Senior School Certificate Examination)

10年生終了時のAISCCEで、文科系(Art)科学系(Science)商業系(Commerce)の3つに進路が振り分けられる。12年生終了時のAISSCEでは、大学や学部が決まる。工科大学や医科大学など一部の大学を除いて一般的に大学の入学試験はなく、学校の成績によって大学や専攻が決まるため、これらの試験に必死になるのである。

④. 公立学校と私立学校

公立学校(government school)は現在デリーにおよそ3000校ほどあり、ほぼ無償で教育がなされている。必要経費を集めるにしても、3か月12ルピーといった程度である。公立学校では施設面の問題から二部制にし、午前に登校するクラス、午後に登校するクラスに分け、男女別々の教室に分けているところが多い。貧しい家庭の親も子供を学校にやるようにと給食制度を導入している。一方、一般的に、パブリックスクールと呼ばれている私立学校(private school)もデリーには多く存在する。学校によって異なるが、月に500ルピーから2000ルピーといった授業料を取っている。私立学校は、保育園・幼稚園から12年生までの一貫教育をするところが多い。公立学校と私立学校では設備的な面や教育の質にかなり差が見られるらしく、学歴によって職業や収入が決まってしまうインドでは、裕福な家庭はもちろん、デリーのような都市部では、それほど裕福ではない家庭でも中流家庭の教育熱に影響され、多少無理してでも私立学校に行かせたいと思う親は増えてきているようである。

新聞記事によると、デリーの高等裁判所が私立学校の生徒卒の25%を貧しい家庭にあてがうように私立学校に勧告したり、AISCCEやAISSCEの通過率の低い公立学校に対してDelhi Education departmentが指導を入れたり、というように様々な取り組みがなされているが、教育格差はなかなか縮まらないというのが現状のようである。



都会の私立学校



農村の学校(屋外)

2. ニューデリー日本人学校

(1) 学校経営方針

1. 人間尊重の精神に徹します。
2. 活力ある学校の実現に努めます。
3. 規律ある学校を目指します。
4. 開かれた学校づくりに努めます。
5. 使命感あふれた教師を目指します。



(2) 沿革

昭和 39. 9. 1 日本人小学校開校式（本校創立）

＊チャナキャプリ校舎

9. 4 中学生補習授業開始

40.11. 8 スクールバス運行開始

41. 3. 1 第 1 回卒業証書授与式

41. 8.30 校歌・校章制定

44. 2.17 フレンズコロニー校舎へ移転

54. 4. 1 全日制中学部設置

54. 5.29 大使館付属日本人学校と改称

平成元年 1.10 ニューデリー日本人学校と改称

2. 7. 9 新校舎定礎式

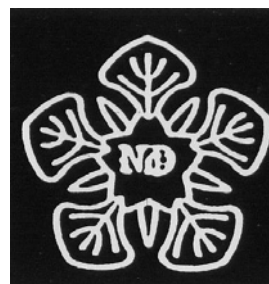
3. 8. 5 バサントクンジ新校舎（現）へ移転・開校式

5. 7.10 学校週 5 日制初実施

6. 1.12 国内の小中学校と同等の課程を有す,在外教育施設として文部省より認定

7. 4.11 幼稚園部開園式

15.11.11 GAKKO BUNKA EDUCATION SOCIETY のステイタスの取得



(3) 日本人会・学校理事会・PTA

《日本人会》

- ・学校の経営主体はデリー日本人会が在する。その運営は同会学校運営部長を理事長とする学校理事会が行う。
- ・校長は日本人会の青少年児童部長を兼ねニューデリー在住の日本人青少年児童の健全育成事業を行う。
- ・主な行事～夏祭り（9月）

《学校理事会》

- ・学校理事会は、「ニューデリー日本人学校理事会規則」及び「ニューデリー日本人学校運営規則」により行う。
- ・理事会は、理事長，副理事長以下、理事 11 名、弁護士、顧問 2 名で構成される。

《PTA》

- ・父母と教職員が協力して家庭と学校と社会における児童生徒の幸福な成長を図ることを目的とする。
- ・運営委員会は、会長・副会長・書記・学年・文化保体・バス委員会の委員長及び副委員長、校長・教頭・教務主任により構成し所期の活動を行う。

(4) 学校施設の概要

平成3年8月5日現地に新校舎完成移転

- *校地総面積 12,200 m² *校舎総面積 6,800 m²
- *体育館 700 m² *校庭 6,000 m²
- *屋内プール 25m × 15m(6コース) *普通教室 10室
- *特別教室 7室 *多目的ホール *コンピュータ室
- *和室 *保健室 *校長室 *職員室 *教材室

(5) 職員数・児童数・授業時数

《職員数》

平成17年度は、文科省からの派遣教員14名と現地採用講師4名、現地スタッフ19名の計37名により、教育活動を推進していた。

《学年別児童・生徒数》H17.8.1

小学部				中学部			
年	男	女	計	年	男	女	計
1	2	6	8	1	4	2	6
2	5	5	10	2	5	8	13
3	5	6	11	3	2	2	4
4	5	7	12	計			11 12 23
5	5	8	13	総計			男 女 計
6	4	3	7	計			37 47 84
計			26 35 61	計			37 47 84

《曜日別時間割》

	月	火	水	木	金	合計
小1	5	5	4	5	6	25
小2	5	5	4	5	6	25
小3	5	7	4	5	6	27
小4	6	7	4	7	6	30
小5	6	7	4	7	6	30
小6	6	7	4	7	6	30
中1	6	7	4	7	6	30
中2	6	7	4	7	6	30
中3	6	7	4	7	6	30
特支	4	4	4	6	4	22

(6) 主要年間行事

一学期 4月12日(火)～8月26日(金)

4月12日(火) 着任式・始業式・入学式

4月29日(金)・5月2日(月) 家庭訪問

5月27日(金)～7月3日(日) 夏季休業

7月24日(日) 日曜参観、8月26日(金) 終業式

8月27日(土)～9月4日(日) 秋季休業

二学期 9月5日(月)～12月22日(木)

9月5日(月) 始業式、9月17日(土) 校内水泳大会
 9月24日(土) 夏祭り、10月19・20・21日 修学旅行
 10月20日(木) 遠足、10月20日(木)・21日(金) 宿泊学習
 11月4日(金) 国際球技大会、11月20日(日) 運動会
 12月22日(木) 終業式、12月23日(金)～1月8日(日) 冬季休業
 三学期 1月9日(月)～3月17日(金)
 1月9日(月) 始業式、2月5日(日) 学習発表会
 3月10日(金) 卒業式、3月17日(金) 修了式・離任式

(7) 教育活動の様子

《少人数を生かした教育》

現在、日本人学校に在席し、いずれ日本に帰る児童生徒の保護者にとって、学力・進学等の問題はともに関心が高く、これらの対策は日本人学校に求められているところである。

ニューデリー日本人学校では、小学校においても一部、教科担任制を導入していた。また、国語・算数数学の授業時数をやや厚くし、学力テストもNRTとCRTを毎年行い、指導の改善の資料とすることにした。中学部では、インターネット上から、模擬試験を取り寄せ、データ分析も行い進学指導の参考としていた。

英会話授業については1～3年生は週1時間、4年生～中3は週2時間実施していた。当初、英会話は、その内容について外国人教師に任せきりになっていた。17年度より、テキストの導入・習熟度別クラス・日本語もできる教師の採用等、改善を図ってきた。



《運動不足の解消》

日本人学校の児童生徒は、骨折する者が非常に多かった。100人に満たない全校児童生徒数であるのに、年間7～8人の骨折者が出るのである。

原因としては、日本と異なる食生活の影響、過酷な気候による疲れ、治安上の問題から自由に公園などで遊ぶことができないなどの理由が考えられる。

学校としては、水泳授業に片寄っていた体育の授業を様々な運動能力を鍛える内容に変える、水曜日の午後は自由参加・自由選択のスポーツ講座を設ける、クーラーの効いた部屋に卓球台を常備する、放課後の学校を開放することによって遊び場を確保する、などの対策をとり、運動不足の解消を図ってきた。



《日本文化の発信》

ニューデリー日本人学校では、単にインドのことを学ぶというのではなく、国際人として必要な資質や能力を体験的に学ぶ…ということを大切にしたいと考えていた。そういった面から考えると、日本人としてのアイデンティティーをしっかりともつことや、日本文化について相手に伝えていく発信力も大切になってくる。そこで、17年度「**インドの木で和太鼓づくりを**」という壮大なプロジェクトをスタートした。



12月には大太鼓2個、中太鼓2個、小太鼓6個、締め太鼓6個の合計22個が完成した。和太鼓演奏は日本人からのインパクトのある文化発信の手段となり得るであろう。

《現地理解・国際交流》

現地理解学習としては、「ヨガ教室」「ヒンディー語教室」象乗り、アート、インド料理などを体験する「現地理解体験学習の日」「修学旅行・宿泊学習・遠足」などを行っていた。

国際交流活動としては、「国際球技大会」「水泳大会」「各学校への相互訪問」などがあつた。

以前は学校行事レベルで行う交流が主であつたが、17年度より、国際交流ディレクターが派遣され、クラス単位での交流が盛んになった。また、イベント的な交流でなく、普段の学校生活の中に、お互いが入る、という試みも開始された。



《行事》

日本人学校にも日本と同様、様々な行事があるが、右の写真は、「夏祭り」の様子である。

「夏祭り」は日本人学校のグラウンドを会場として、日本人会が主催となって行われる。金魚すくいや、日本の食べ物、くじ引きなど、いろいろな出店があり、子供たちだけでなく、デリー在住の日本人、



近所のインド人などが楽しみしている。

左の写真は、運動会で伝統的に行われてきた「インディアンダンス」の様子である。幼稚園児から中学生までインドの衣装を付けて踊る。親たちは、ビデオやカメラで、我が子のインドでの思い出の撮影に余念がない。



《校地内の樹木》

校地内には、多くの木があり緑豊かである。農業機関の専門家の協力を得て、校地内の樹木の名前を同定した。和名がついているものについては和名を対応し、和名、科名、学名、ヒンディー名（英名）、及び解説を表したプレートを作成し、取り付けた。

以下の表は、校地内の樹木の一覧である。



No.	和名	科	学名	ヒンディー名 (英名)
1	インドゴムノキ	クワ科	<i>Ficus elastica</i>	Rubber plant
2	マストツリー	バンレイシ科	<i>Polyalthia longifolia</i>	Ashok pendula
3	サボジラ	アカテツ科	<i>Achras zapota</i>	Chiku
4	ワサビノキ	ワサビノキ科	<i>Moringa oleifera</i>	Drum stick
5	(チャイナオレンジ)	ミカン科	不明	China orange
6	インドセンダン (ニーム)	センダン科	<i>Azadirachta indica</i>	Neem tree
7	ガジュマル	クワ科	<i>Ficus retusa</i>	Pilkhn
8	トックリヤシ	ヤシ科	<i>Mascarena lagenicaulis</i>	Bottle Palm
9	インドソケイ (プルメリア)	キョウチクトウ科	<i>Plumeria alba</i>	Kanakchmpa
0	インドボダイジュ	クワ科	<i>Ficus religiosa</i>	Pipal
1	(ビャクシン属の一種)	ヒノキ科	<i>Juniperous indica</i>	Saru
1 2	ハイビスカス (ブッソウゲ)	アオイ科	<i>Hibiscus rosa-sinensis</i>	Gudhal
1 3	(イチジク属の一種)	クワ科	<i>Ficus infectoria</i>	Bud
1 4	ブーゲンビリア	オシロイバナ科	<i>Bougainvillea spectabilis</i>	Bougainvillea
1 5	シタン	マメ科	<i>Delbergia sisso</i>	Shisham
1 6	ザクロ	ザクロ科	<i>Punica granatum</i>	Anar
1 7	パパイヤ	パパイヤ科	<i>Carica papaya</i>	Papita
1 8	レモン	ミカン科	<i>Citrus limon</i>	Nimboo
1 9	(ツゲモドキ属の一種)	トウダイグサ科	<i>Putranjiva roxburghii</i>	Putranjiva
2 0	グアバ	フトモモ科	<i>Psidium guajava</i>	Amrood
2 1	(バンブー類の一種)	イネ科	不明	Bamboo
2 2	ジャックフルーツ	クワ科	<i>Artocarpus heterophyllus</i>	Kathal
2 3	マンゴー	ウルシ科	<i>Mangifera indica</i>	Mango
2 4	ムラサキフトモモ	フトモモ科	<i>Syzygium cumini</i> (<i>Eugenia jambolana</i>)	Jamun
2 5	フサナリイチジク (ウドンゲ)	クワ科	<i>Ficus glomerata</i>	Gullar

26	ライム	ミカン科	Citrus aurantifolia	Musambi (Sweet lime)
27	不明	ミカン科	不明	Malta
28	カエンジュ (ホウオウボク)	マメ科	Delonix regia	Gulmohar
29	インドワタノキ	キワタ科(パンヤ科)	Bombax ceiba	Seamal
30	キバナキョウチクトウ	キョウチクトウ科	Thevetia nerifolia	Yellow kanner
31	(モモタマノ属の一種)	シクンシ科	Termanlia belerica	Baheda
32	ムユウジュ	マメ科	Saraca asoca	Sita ashok
33	サラソウジュ	フタバガキ科	Shorea robusta	Sal
34	ユーカリ	フトモモ科	Eucalyptus spp	Eucalyptus
35	ハゴロモノキ	ヤマモガシ科	Grevillea robusta	Silver oak (silk oak)

3. インド風物雑感

(1) 交通事情

ニューデリーでの生活は、ドライバーを雇っての生活であったが、行く前は時々、自分で運転することもあるのかなと思っていた。しかし、現実を目にしてそれは不可能であることをすぐに理解した。ニューデリーの道路は、車、人、牛（時には象・ラクダ・ヤギなど）であふれかえっている。信号無視・逆行してくる車・事故を起こしてひっくり返っているトラック・信号で止まると物乞いや物売りが寄ってくる…。2020年までには網の目のように走ることを予定されている地下鉄は、この街の道路状況を改善する切り札となり得るのか。



渋滞



道路標識



地下鉄

(2) 路上の珍商売

店舗を構えた商売の他に、ちょっと、路地裏にはいると様々な商売を路上で行っている様子が見られる。

40度にもなる酷暑の中の照り返しのきつい路上は、軽く50度を超える。そんな中で、生きていくために彼らは働く。日本では見られないような路上の商売が、そこには展開する。とにかく人口の多いこの国では、様々な商売が成り立つのだ。



耳かき屋



体重測定屋



床屋



ミシンがけ屋

(3) 人々の娯楽

インドでは映画製作本数が年間約800本、世界一と言われている。ムンバイ（旧称ボンベイ）で作られるインド映画は、アメリカのハリウッド映画に対して、ボリウッド映画と呼ばれている。50チャンネル以上見られるケーブルTVに押され気味とはいえ、まだまだ娯楽の王様である。



カルホナホ

歌あり、踊りあり、アクションありの3時間に及ぶインド映画のスタイルは日本人にはきついものがあるが、はまると何とも言えない味があり、すっかりはまってしまった私はDVDが3年間で50本以上となり、インド映画通(?)になってしまった。

「今度出たカルホナホのダンス場面で10秒だけ、ラニ・ムカルジとカジョール（有名女優）が参加して踊っているのがついた？」

などとインド人に言うと、彼らは喜び、しばしの間、映画談義に盛り上がるのであった。

(4) アメリカの医者の38%、NASAの職員の36%はインド人

インドの様子を語るときの難しさは、何を切り取って語ってもそれはインドの一面でしかないことだ。「平均」を語ることが困難なのである。たくさんの路上で生活人々…というのも事実であったし、近所に住む車を3~4台所有した我々より裕福そうなインド人…というのも事実である。

しかし、我々日本人がよく知らない間に、確実に変わりだしたのは事実のようだ。今や、アメリカの医者の38%はインド人、NASAの職員の36パーセントはインド人…とのことである。

「IIT（インド工科大学）に落ちたら、MIT（マサチューセッツ工科大学）に行こうかな…」

という冗談があるほど、インドは力をつけてきている。

いい加減「悠久の国インド…」「ガンジス川で沐浴…」というイメージだけでインドを語っている場合ではないと思うのである。